

『南山神学』30号(2007年2月) pp.173-191.

【研究ノート：典礼史研究】

高田三郎と典礼聖歌 (1)

西脇 純

はじめに

本研究は、日本のローマ・カトリック教会の典礼史上少なからぬ意義を持つと思われる作曲家高田三郎(たかた・さぶろう、1913-2000年)の典礼聖歌の分野における活動を、資料に基づき素描する試みである。

高田三郎の典礼聖歌に焦点をあてた研究は、これまでも、横坂康彦¹、八木原ゆか理²、加藤清子³、小田賢二⁴、赤尾裕子⁵、齋藤克弘⁶らによって行なわれてきており⁷、日外アソシエーツ社の「人物書誌大系シリーズ」からも高田三郎の業

*略記は S. M. Schwertner, *Theologische Realenzyklopädie. Abkürzungsverzeichnis. 2., überarb. und erw. Aufl.*, Berlin-New York 1994. に従った。

¹ Y. Yokosaka, *Tenrei Seika and Contemporary Church Music in Japan* (Yale University 1981) 90 pp.

² 八木原ゆか理「『典礼聖歌』に於ける高田三郎作品研究—宗教と音楽に関する一考察」(日本大学芸術学部音楽学科卒業論文) 1985年, 全193頁。

³ 加藤清子「新しい日本音楽についての一研究—高田三郎氏の創作を中心に」(岡山大学教育学部小学校教員養成課程 [修了論文]) 1987年, 全124頁。

⁴ 小田賢二「グレゴリオ聖歌の研究と国語聖歌の実践」『カトリック研究』58号(1990年) 95-127頁。

⁵ 赤尾裕子「現代日本のカトリック典礼音楽の研究」(宮城教育大学大学院教育学研究科修士論文) 1992年, 全96頁。

⁶ 齋藤克弘「感謝の祭儀への行動参加—ともに歌う 信仰の共同体験」(上智大学神学研究科神学専攻神学修士論文) 1994年, 全79(19)頁。

⁷ 拙稿「インカルチュレーション—日本における典礼聖歌刷新への歩みに寄せて—」『日本カトリック神学会誌』3号(1992年) 97-134頁も参照されたい。

績を見渡そうとするリファレンス・ツールが出版されている⁸。しかし規模はまだ十分とはいえず、研究もやっとその端緒が開かれたに過ぎない。まずは関連資料を公共的な場に集約させ、資料の散逸を防ぎ、今後の研究に備えることが必要であろう⁹。それによって初めて、資料に基づいた議論の積み重ねも可能となるだろう。

このような萌芽的な研究状況のなか、一昨年、高田三郎の帰天5周年を記念する演奏会「愛・地球博パートナーシップ事業 高田三郎作品による『ひたすらないのち 愛知演奏会』」が開催された（2005年9月18日、愛知県芸術劇場コンサートホール、主催：南山学園ほか）。その際、高田三郎の典礼聖歌の自筆譜が演奏会当日の来場者の閲覧に供され、演奏会終了後、高田留奈子夫人より手稿譜が南山大学に寄贈されることになった。この寄贈を受け、南山大学では、明治期以降の聖歌コレクションにおいて実績のある同図書館カトリック文庫が、地元名古屋出身でもある作曲家高田三郎の典礼聖歌関連の資料蒐集に着手することになったのである。高田作品のうち典礼聖歌に特化した蒐集としては、他に類例を見ない試みといえることができる。これまで同文庫には、前述の自筆楽譜をはじめ視聴覚資料を中心に600点以上が寄せられ、現在整理作業が進められている。今後のコレクションの成長が期待される場所である。典礼聖歌については作曲者自身が自著『典礼聖歌を作曲して』（オリエンズ宗教研究所、1992年）において、聖歌作曲への根本姿勢から個々の聖歌の演奏法にいたるまで、詳しく述べている。とはいえ、今回蒐集が始まった南山大学の資料群のなかには、作曲者自身による聖歌指導の記録や講演記録などが含まれており、説得力を持つ資料として、今後、より幅広い立体的な高田三郎研究が展開される可能性を秘めている。例えば手書き楽譜と出版楽譜との比較は作品研究を一層

⁸ 国立音楽大学附属図書館高田三郎書誌作成グループ（市川利次・平尾民子）編『人物書誌大系31 高田三郎』（日外アソシエーツ、1995年）

⁹ 日本近代音楽館（東京都港区）は、高田三郎の自筆譜の相当数をはじめ多数の資料を収蔵しており、典礼聖歌研究にとっても貴重な情報拠点の一つである。

深めてゆくであろうし、練習記録や講演記録の分析は作曲者の典礼聖歌観をこれまででない仕方でもるみに出すであろう。

本研究は、こうした可能性を指摘しつつも、自らは典礼史の立場からの研究に留まりたい。寄贈された資料群の中には、数は少ないものの、高田三郎の典礼聖歌に対する考えをうかがい知ることのできる貴重な文字資料がいくつか存在する。本研究では、主にそうした文字資料を紹介しつつ、典礼史において高田三郎が果たした役割について考えてゆくことにしたい。第1回となる本ノートにおいては、まず典礼聖歌の成立事情を簡単に概観し(1.~2.)、そのうえで、今回寄せられた文字資料のうちのいくつかに焦点を当てることにしたい(3.~4.)。

なお、典礼聖歌の用語が何を指すかについては基準となる定義はまだないように見受けられる¹⁰。本研究においては、ひとまず「第二バチカン公会議の要請を受け、日本のローマ・カトリック教会の典礼での使用のために新たに作曲された一群の聖歌」と理解しておきたい。全国での使用のために編纂されたいわゆる統一聖歌集を指す場合には『典礼聖歌』と表記する¹¹。

1. 第二バチカン公会議と典礼の国語化

ローマ・カトリック教会が1962年から1965年にかけてローマにおいて第二バチカン公会議を開催し、この時期を境に大きく様変わりしたことはよく知られている。公会議は、キリスト教信仰の伝統を現代世界の状況に即してよりよ

¹⁰ 定義については、宍功「典礼聖歌」『日本キリスト教歴史大事典』（教文館、1988年）914頁を、そこに挙げられた参考文献とともに参照されたい。宍は典礼聖歌を2つの意味に理解する。1つは「カトリック教会が礼拝に用いる聖歌の一般的呼称」であり、もう1つは「第2ヴァチカン公会議が公布した典礼憲章の意図に沿って新しく作られた日本カトリック教会の聖歌集」である。現在刊行中の『新カトリック大事典』（研究社、1996年～）には項目が立てられていない。

¹¹ 1968年以降の分冊時代を経て1980年に合本化された典礼司教委員会監修・典礼聖歌編集部（CL）編『典礼聖歌』（あかし書房、1980年）を指す。典礼聖歌の名を冠する聖歌集には他にも、カトリック東京大司教区認可による典礼音楽研究会編著『カトリック典礼聖歌集』（サンパウロ、1992年）がある。高田三郎・高田留奈子『典礼聖歌—合本出版後から遺作まで』（オリエンス宗教研究所、2004年）は、東京大司教の出版認可を受けている。

く伝えることの必要性を確認するとともに、そのための自己改革を教会自身に促がした。教会の「今日化、現代化 *aggiornamento*」が標語のようにたびたび用いられていたことは、この時期の教会の動向を目の当たりにした世代にはまだ鮮やかな記憶として残っていることだろう。

第二バチカン公会議は、典礼こそが教会生活の頂点かつ源泉であるとの立場から、真っ先に、『典礼憲章』を公けにした（1963年12月発布）。これを機に、以降、全世界のローマ・カトリック教会が一斉に本格的な典礼刷新に着手することとなったのである。

「本格的」というのは、ローマ・カトリック教会内ではすでに19世紀からフランスとドイツを中心に典礼刷新の動きが広がっており、これを積極的に評価する教皇文書も出されていたからである¹²。「典礼運動 *mouvement liturgique / Liturgische Bewegung*」と呼ばれるこの運動の根本主張は、典礼を教会生活の中心に据え、信徒の典礼参加を促がそうというものだった。この主張にしたがって、第二バチカン公会議以前にも、ミサ典書邦語訳出版などの信徒への啓蒙活動が行なわれていたのである¹³。したがって、第二バチカン公会議以後突然、典礼に変化が起こったということではなく、それ以前の息の長い運動が、第二バチカン公会議の『典礼憲章』において実を結んだと見るべきであろう。

その意味では、前出『典礼聖歌』に収められた高田三郎のミサ賛歌「やまとのささげうた」も、公会議以前の「典礼運動」の流れを汲んでいるといえる¹⁴。

¹² Pius XII, *Mediator Dei* = AAS 39 (1947) 521-600. 邦訳は、『ピオ12世回章 メディアトル・デイ』（キリスト教祭礼研究所監修、典礼叢書I、小柳義夫訳、あかし書房、1970年）。

¹³ 最も知られたものとしては、ドイツのベネディクト会司祭アンセルム・シュット (*Anselm Schott, 1843-1896*) が始めたいわゆる『シュット・ミサ典書 *Schott Meßbuch*』が挙げられよう。これについて詳しくは以下を参照。A.A. Häußling, *Das Missale deutsch. Materialien zur Rezeptionsgeschichte der lateinischen Meßliturgie im deutschen Sprachgebiet bis zum Zweiten Vatikanischen Konzil. Teil 1: Bibliographie der Übersetzungen in Handschriften und Drucken* (LQF 66), Münster 1984, 92-120; E. Sauser, *Art. Schott*, in: BBKL 9 (1995) 809-812 (Lit.). 日本では、フェデリコ・バルバロ編訳『毎日のミサ典書』（ドン・ボスコ社、1955年）などがよく知られる。

¹⁴ 「やまとのささげうた」は『典礼聖歌』（上掲書、注11）の付録に収録されている（451-455番）。

「やまとのささげうた」は『典礼憲章』発布の前夜、1963年6月に初演された、日本語テキストに基づく聖歌である¹⁵。典礼がまだラテン語で祝われていた時代に、条件つきながら、ミサ賛歌を日本語で歌うことが許されていたということは日本の典礼史にとって記憶しておくべきことだろう。「やまとのささげうた」は典礼運動の日本における一つのささやかな果実といえる。

とはいえ、新しい典礼の枠組みはやはり『典礼憲章』の発布があって初めて可能になった。『典礼憲章』が拓いた典礼の新境地の一つは、それまでラテン語中心に祝われていた典礼を、それぞれの国の言語で祝ってもよいとする方針だった。それは、教会生活の中心である典礼、わけてもその祝いの内容が、国語で表現されることによって、国語で日常を営む信徒にいつそう親しみやすくなり、ひいては現代社会にも理解されるようになることを願っての措置だった。というのも、祝いの内容の理解が進めば、信徒の自発的な典礼への参加をいつそう期待することができる、そのようにしてキリスト教信仰がまず教会自身のなかに浸透すれば、現代世界への福音宣教の足がかりも得られると考えられたからだ。

この方針に基づいて、その後、各国で国語あるいは公用語による典礼書が次々と公刊されてゆく。日本では、日本カトリック司教協議会が1964年4月、協議会内に新たに「典礼全国委員会」を設置、この「典礼全国委員会」が典礼書の日本語版の作成の任にあたったのである¹⁶。

2. グレゴリオ聖歌と高田三郎の典礼聖歌

典礼の言語が国語になったことで、典礼音楽を取り巻く状況も大きく変化した。それまでの典礼言語は基本的にはラテン語だったので、ラテン語をテキス

¹⁵ 高田三郎『典礼聖歌を作曲して』（オリエンズ宗教研究所、1992年）310-328頁、前掲拙稿「インカルチュレーション」（注7）109-113頁参照。

¹⁶ 同、114頁参照。

トとするグレゴリオ聖歌が典礼音楽の中心を占めていた。ところが、第二バチカン公会議以後、替わって国語聖歌がその座を占めることになったからだ。

ただし『典礼憲章』自身は、グレゴリオ聖歌を「ローマ典礼に固有の歌」と位置づけ、数ある典礼音楽の中でも「首位を占めるべき」音楽であると評価を惜しまない(116条)。同じ『典礼憲章』がグレゴリオ聖歌集の規範版の出版を要請したり、小さな教会でも使用できるような簡略版聖歌集の必要性を指摘しているのも(117条)、引き続き教会の中でグレゴリオ聖歌が歌われることを想定してのことだったのである。

なぜグレゴリオ聖歌という、原則として無伴奏による「うた」を、公会議はことさらに評価したのだろうか。その背景には「ともにうたう」という礼拝行為がキリスト教会にとってその存在理由にまで関わる大きな意味を持つのだという理解があったと思われる。

周知のとおり、「教会」という言葉の原語「**ekklesia**」には「呼び集められたもの」という意味がある。内なる神の呼びかけを聴き取った人々が、その呼びかけに応じて集まる場、それが教会である。教会はそのような自己認識によって成り立っているといえよう。まず先に神のイニシアチブがある、神がわたしたちをここに呼んだのだという意識がある。ゆえに教会という信徒集会の場が成立すること、それ自体が「神のわざ *opus Dei*」だと理解する。

呼び集められた人々はまず、彼らと呼び集めたお方、すなわち神に耳を傾けようとする。これは実際の典礼では聖書朗読という形式をとる。

そして聖書朗読で聴いた神のことばを味わい、神のことばへの共感から、神への賛美と感謝の声をあげる。これが、聖書朗読に応じて歌われる答唱である。テキストに詩編を用いることも多く、そのため「答唱詩編」とも呼ばれる。しかも詩編自体が聖書でもある。聖書の朗読と聖書による答唱、これが典礼がそもそも成り立つための最も基本的な構造といえる。典礼はことばを介して神と人とが出会い、対話し、交流する場だからだ。キリスト教にとり、救い主イエス・キリストは人となったロゴス(神のことば)である(ヨハ 1:1-18 参照)。それゆえ、集められた人々が「ことばを介して神をたたえうたう」ということ

は、典礼にとってはなくてはならない、本質に属することだと理解されるのである。そして、この使命を最もよく果たし、しかもことばと音楽による総合芸術の高みにまで達したのがグレゴリオ聖歌だったということであろう。

しかしながら、あれから40年経った今、グレゴリオ聖歌は一部の修道院を除けばローマ・カトリック教会の典礼からほとんど姿を消してしまった。これは、典礼における言語の枠組みが大きく変わったというところに主な要因があろう。詳述は別の機会に譲らねばならないが、最近では、グレゴリオ聖歌が典礼の場でうたわれなくなったことによる負の部分も指摘されるようになってきている。

とはいえ、グレゴリオ聖歌の本質は、聖書のことばと典礼の祝いに即して、その内容を豊かに表現することによって神をたたえるというところにある。したがって、この本質を受け継ぐならば、歌われる言語こそ異なれ、グレゴリオ聖歌の精神そのものは伝承されてゆくのだという見方もできる。そのひとつの事例として、日本の典礼音楽、わけても高田三郎らが作曲した典礼聖歌を位置づけることができるように思われる。

いうまでもなく、高田三郎は、特に合唱音楽の分野で功績を遺した、現代日本を代表する作曲家の1人である。代表作「水のいのち」（高野喜久雄 詩、1964年）や「心の四季」（吉野弘 詩、1967年）などは今でもしばしば演奏会のプログラムに採り上げられている。40才のときローマ・カトリックの洗礼を受け、以後、数々の宗教作品を書くようになり、この分野の作品としては「イザヤの預言」（1979-80年）、「争いと平和」（1983年）、「ヨハネによる福音」（1985年）が「聖書3部作」として知られている¹⁷。

しかしながら、高田が長年にわたり心血を注ぎ、この分野におけるライフワークとしていたのはやはり典礼聖歌だったといえよう。1967年に典礼全国委員会の教会音楽常任委員に任命されて以降、高田は典礼聖歌の作曲に取り組むとともに、自ら、同じ年に典礼全国委員会内に発足した「典礼聖歌編集部」のメ

¹⁷ 高田三郎の主要作品については、鈴木茂明「高田三郎主要作品年表」（私家版、2001年）を参照。

ンバーとして聖歌集編纂プロジェクトに携わった。詳細は他の機会に譲りたいが、同編集部の手になる『典礼聖歌』は翌1968年からまず分冊形式で発行され、1978年までに9分冊(9集)が出されたのち、1980年に合本の出版をみて今日に至っている。彼が作曲した典礼聖歌の多くもこの『典礼聖歌』に収められている。

彼の典礼聖歌の作曲に対する姿勢は、彼の作曲そのものに対する姿勢と一致している。彼自身の言によれば、彼はすでに学生時代から、ある作曲原則を自らに課していたという。そのうちの一つは以下のようであった。

「日本語のテキスト」を持った作品か、「日本の旋律」と関連ある作品を書いて行こう。毎日そのことばで生活し続けてきたもののみが知っているこの国語の深い味わいまで書けるのは、また、日本の旋律にしてもそのほんとうの精神を(そのムードではなく)生かすことができるのは、われわれ以外にはなく、また、われわれの責任なのだから。¹⁸

この原則が、実際に学生時代からの、つまり洗礼を受ける前からの彼の作曲信念だったのか、あるいは長年の作曲生活の中で次第に積み上げられたものなのか、おそらくそのどちらでもあったと思われる。いずれにせよ、この原則は、『典礼憲章』が国語聖歌の作曲者に求める作曲姿勢と一致する。

というのも、『典礼憲章』は、教会音楽について定めた第6章の第119条で次のように要請しているからだ。

¹⁸ 高田三郎「回想の記—第七回：山形民謡によるバラード」『音楽の世界』(1990年4月号)25-27頁, 26頁。1989年から1992年まで書き続けられた「回想の記」は、後に高田三郎『来し方』(音楽之友社, 1996年)として出版された。なお、『音楽の世界』誌の要請に応じて再び同誌に連載された「回想の記・続」も、帰天後、高田三郎『ひたすらないのち』(カワイ出版, 2001年)にまとめられている。

ある地方、特に宣教地において、民族の宗教的、社会的に大きな重要性をもつ固有の音楽伝統がある場合、かれらの宗教心を形成するためにも、また礼拝をその天性に順応させるためにも、[...]この種の音楽に正当な評価と、ふさわしい位置が与えられなければならない。[...]¹⁹

この条文を日本の文脈で読むならば、次のようになる。すなわち、日本の地に生まれ育った人々の宗教心を大切に、またキリスト教典礼そのものを日本の風土に根付かせるためにも、日本の伝統音楽の要素を活かす必要がある、と。

実際、高田は典礼聖歌作曲という長年の歩みのなかで、二つの音楽伝統の特質を融合させることが可能だとの確信を深めていった。一つは、聖書と典礼のことばを歌い祈る典礼芸術として最高峰を極め、それゆえに「典礼行為において他の点からは差異がないものとすれば首位を占めるべきもの」（『典礼憲章』116条）といわれるグレゴリオ聖歌であり、いま一つは、日本に生まれ育ち、日本語で日常生活を送る人々の宗教心を支える日本の伝統音楽である。高田によれば、その「目的は、日本を強調することでも、何か特別な音楽を作ることでもなく、どう日本人の祈りの心と一致するかということであった。」²⁰

こうした確信に基づく高田の作曲技法について、本研究は立ち入ることはできない。冒頭にも触れたように、典礼聖歌の活動において高田がどのような立場に立ち、何を目指したかを、主に文字資料に基づいて論ずることが本研究の課題であるからだ。そこで、ここではさっそく資料紹介に移ることにしよう。

3. 資料紹介

今回紹介するのは、高田留奈子夫人より寄贈された文字資料の一部、「国立音楽大学附属図書館」と印刷された B4 サイズの封筒に入った資料である。封筒の

¹⁹ 日本司教団秘書局訳『典礼憲章』（中央出版社、1968年）54頁。

²⁰ 高田三郎『典礼聖歌を作曲して』、上掲書（注15）315頁。

裏に高田の自筆で「土屋論文」と書かれており²¹、中に 26 点の資料が収められていた。以下、便宜上番号を振ったうえで紹介しよう。

1. 「現代典礼研究会第一回総会」(総会プログラム, A4 縦版, 1 葉, 両面印刷)
2. 「現代典礼研究会 第 1 回総会 講演レジメ」(B5 縦版, 横書, 4 頁)
3. 「典礼刷新のための基礎資料」(B5 縦版, 横書, 20 頁)
4. 「現代典礼研究会会員名簿 1991 年 1 月 14 日現在」(B4 横版, 3 葉, 両面印刷, 中綴じ)
5. 「現代典礼研究会 会費納入状況 1991 年 1 月 13 日現在」(B5 縦版, 1 葉)
6. 「現代典礼研究会規約」(A4 縦版, 1 葉)
7. 「現代典礼ニュース 第 4 号」(現代典礼研究会発行, B5 縦版, 縦書, 4 頁)
8. 「主日の福音資料集 B 年 年間第二主日 (一月二十日)」(A4 縦版, 横書, 49 頁)
9. 「『憐れむ』ということ—主日の福音資料集の使い方」(B5 縦版, 縦書, 4 頁)
10. 「『主日の福音資料集』を活用するための Rēma」(B5 縦版, 縦書, 6 頁)
11. 「試作版・カルポス」(A4 縦版, 縦書, 1 葉)
12. 「真生会館聖書センター会員募集のお知らせ」(A4 横版, 縦書, 1 葉)
13. 「音楽・言語・信仰をめぐって—文化神学史的考察— 鱒屋 壺正」(A4 縦版, 横書, 9 葉)
14. 「音楽・言語・信仰をめぐって—文化神学史的考察— 土屋吉正」(A4 縦版, 横書, 9 葉)
15. 「文化への受肉—全教会の歩みの中での日本教会の歩み— 土屋吉正」(A4 縦版, 横書, 18 葉)
16. 「儀礼と典礼の現代化の試み」(A4 横版, 縦書, 3 葉)

²¹ 「土屋」は、イエズス会士で日本を代表する典礼学者、土屋吉正 (1926-) を指す。長らく上智大学神学部で教鞭を執った。

17. 「典礼用語と宣教用語刷新の意義」(A4 縦版, 横書, 8 葉)
18. 「神学的に重要な用語の区別と解説 (1995・12・1 改定)」(A4 縦版, 横書, 12 葉)
19. 「朗読聖書編集方針, 典礼用詩編の基本方針」(A4 縦版, 横書, 5 葉)
20. 「『葬儀』儀式書改訂作業の経緯」(A4 縦版, 横書, 4 葉)
21. 「『葬儀』(改訂版) 目次」(A4 縦版, 横書, 1 葉)
22. 「緒言」(A4 縦版, 縦書, 7 葉)
23. 「グレゴリオ聖歌の研究と国語聖歌の実践 小田賢二」(A4 横版, 縦書, 22 葉)
24. 「日本におけるグレゴリオ聖歌の今日的意味 宍功」(A4 横版, 縦書, 12 葉)
25. 「コピーA」(B5 横版 [J. A. Jungmann, Das Eucharistische Hochgebet: Grundgedanken des Canon Missae, Würzburg 1954, 50-51.])
26. 「コピーB」(B5 横版 [J. A. ユングマン著『聖体祭儀—ミサ典文の中心思想』キリスト教祭礼双書1, 南窓社, 1968年, 74-75頁])

この封筒の中身のうち土屋吉正の論文とただちに同定しうるのは、土屋吉正の著者情報を記載する資料13~15ならびに資料16の4点である。うち、資料13と資料14はほぼ同じ内容で氏名表記のみを異にする。これらはおそらく、1991年5月4日に国際基督教大学チャペルにて開催された演奏会「MOZART MISSA—1780年ザルツブルク大聖堂における復活祭ミサの復元」(主催: パッハアカデミー/東京, 共催: ICU宗教音楽センター)のパンフレット(筆者は未見)に掲載された土屋吉正の解説文の原稿ではないかと思われる²²。資料15

²² パンフレットの解説文については、赤羽根恵吉「カトリック教会におけるラテン語典礼, ラテン語聖歌の排斥運動」(<http://www.tim.hi-ho.ne.jp/catholic-act-d/ronten.html> 2007年3月7日取得)を参照。

は『カトリック研究』誌に掲載された論文の原稿²³、資料 16 は 1985 年 12 月開催の「第 30 回 現代における宗教の役割研究会」における発表原稿であろう²⁴。

また、資料 17 およびクリップ留めされた資料 18 も、土屋の名前はみられないものの、内容からみて土屋の筆によるものとみなして差し支えないだろう。いずれも、典礼をことばとするしによる信仰表現と位置づける土屋神学の立場からの示唆に富む論考である²⁵。A4 縦版 5 葉からなる資料 19 には、それぞれ 1 葉目に 3 頁、2 葉目に 4 頁という具合に 7 頁まで頁付けがなされている（つまり、1～2 頁と 8 頁目以降を欠く）。うち 1～2 葉目（3～4 頁）が「朗読聖書編集方針」であり、3～5 葉目（5～7 頁）が「典礼用詩編の基本方針—詩編の訳に関する教会の伝統と公会議の意図—」である。両者とも典礼書の改訂・編集の際の基本方針の確認をカトリック中央協議会典礼委員会に求める内容となっており、土屋が作成に携わった可能性が高い²⁶。

²³ 土屋吉正「言語と文化の神学—文化への受肉の歩み—」『カトリック研究』57 号（1990 年）25-48 頁。同 48 頁に「本稿は、一九八九年十一月に韓国ソウル特別市で開かれた韓国教会史研究所の国際学術会議で発表されたものである」と記されている。資料 15 の 18 葉目は「要約」と記載されていることから、同資料は同会議における土屋の発表原稿である可能性が高い。これを高田が入手したのであろう。

²⁴ 『現代の典礼』誌創刊号に資料 16 とほぼ同名の論文がある。土屋吉正「儀礼と典礼現代化の試み」『現代の典礼』1 号（1991 年）102-123 頁。同 121 頁に「本稿は、1985 年十二月に開かれた『現代における宗教の役割研究会』の第三十回研究会で発表された原稿に加筆されたものである」との記載がある。

²⁵ 土屋は第二バチカン公会議以前から、カトリック用語の抱える問題について度々発言をしている。土屋吉正「カトリック用語の選択について—国語表記法改革十周年を迎えて—」『布教』11 卷（1957 年）41-45 頁、同「カトリック刊行物における表記改善の試み—現行公教要理および公会堂祈文の表記をめぐって—」『布教』11 卷（同）212-216 頁、同「山中巖彦師の訳業とこれからのカトリック用語」『布教』11 卷（同）649-651 頁参照。本資料 17 および 18 も、その後土屋自身が携わることとなった日本における典礼刷新事業の経験から生まれた貴重な論考であるといえる。いずれも、高田によるメモ書きが残っており、高田がこの問題にも関心を寄せていたことをうかがわせる。

²⁶ 「朗読聖書編集方針」は、提言を「1. 聖書朗読の表題」「2. 冒頭句などの補足」「3. 代名詞は名詞に置き換える」「4. 結びの動詞の語尾」「5. 直接話法を活かす」の 5 項に分けてまとめている。続く「典礼用詩編の基本方針」は、詩編書の改訂を求めた『典礼憲章』91 条の背景に触れたうえで「詩編が教会の祈りであり、歌であることを重視し、日本でも始められた詩編を歌う教会の賛美の伝統を大切に育てていく賢明な配慮を、典礼委員会が積極的にとられるよう希望するものである」と締めくくっている。

他方、資料 20 以降は土屋の書いたものではない。まず、ホッチキス留めされ、さらにクリップ留めされた資料 20～22 であるが、このうち資料 20 は、1989 年から 1993 年に至るまでの『葬儀』儀式書改訂委員会の活動記録である。資料 21、資料 22 とともに同委員会において作成されたと推測される²⁷。資料 21 と 22 には高田のメモ書きがみられ、高田の本儀式書への関心をうかがわせる。

資料 23 と資料 24 はともに前出『カトリック研究』誌に掲載された論文の原稿である²⁸。

資料 25 および 26 は、ユングマンの著書『聖体祭儀—ミサ典文の中心思想』（前出）から、グレゴリオ聖歌のミサ 18 番の感謝の賛歌（Sanctus）に言及する部分の原文（資料 25）と翻訳（資料 26）のコピーである。いずれも該当する部分が鉛筆書きでチェックされている。

資料 1～6 は、1991 年 1 月 15 日に東京・四谷の雙葉学園同窓会館にて開催された現代典礼研究会の第 1 回総会の際の配布資料と思われる。A4 縦の黄色用紙の資料 1 には開催の日付はないものの、その内容は『現代典礼ニュース』誌に掲載された第 1 回総会報告と合致する²⁹。

現代典礼研究会とは「第二バチカン公会議の典礼刷新を日本の教会に推進するための研究と実践を目的」に、1990 年 4 月 1 日に発足した有志研究会である。その活動内容は「1. 会員が相互の研究に協力し合うための研究会, 2. 典礼に関する研修会, 3. 典礼に関する出版, 4. 典礼に関する資料・情報の収集および提供, 5. 機関誌の発行, 6. 人材の養成, 7. その他必要なこと」である³⁰。これま

²⁷ 土屋、高田とも、『葬儀』儀式書改訂委員会のメンバーではなかったが、典礼委員として土屋が資料を持っていた可能性がある。葬儀においても典礼聖歌が歌われることになっているので、参考資料として土屋が高田に渡したと考えられなくもない。

²⁸ 資料 23 は、帘功「日本におけるグレゴリオ聖歌の今日的意味」『カトリック研究』57 号（1990 年）49-70 頁、資料 24 は、小田賢二「グレゴリオ聖歌の研究と国語聖歌の実践」、上掲論文（注 4）。

²⁹ 大見寿夫「現代典礼研究会第一回総会開催される—講演、実践報告、総会、交わり」『現代典礼ニュース』5 号（1991 年）2-5 頁。

³⁰ 以上、「現代典礼研究会規約」（本稿資料 6）、土屋吉正「『現代典礼研究会』発足のこあいさつ」『現代典礼ニュース』1 号（1990 年）1 頁（本資料 7）参照。

で全国各地での典礼研修会開催のほか、前出『現代典礼ニュース』(全38号)、『現代の典礼』誌(全3号)、『典礼ブックレット』(全2号)刊行などの活動を行なってきた。

現代典礼研究会発足のそもそものきっかけは、オリエンズ宗教研究所発行の『聖書と典礼』誌(1961年創刊)の手引きとして1978年同研究所より創刊された『ことばととしし』誌の編集スタッフの活動にさかのぼる³¹。『ことばととしし』編集部は、同誌の編集活動に加え、1986年からは教会音楽講座などの研修会活動も始めていたが、月刊誌『毎日のミサ』の創刊(カトリック中央協議会発行、1989年1月)に伴い、第121号(1988年12月)をもって『ことばととしし』誌の閉刊を決め、引き続き司牧典礼研究会として『聖書と典礼』誌の編集にあたりるとともに典礼研修活動の充実を図ってゆくことになった³²。この司牧典礼研究会の2年ほどの活動を経て、1990年4月に新たにスタートを切った研究会が現代典礼研究会である。ちなみに高田三郎は『ことばととしし』誌の45号(1982年)から98号(1987年)までの間に49回に亘り「連載・典礼聖歌解説」を連載しており、この連載が後の自著『典礼聖歌を作曲して』(前出)の骨格を成している。また、現代典礼研究会主催の典礼研修会において自ら自作の典礼聖歌の講師を度々務めてもいる。

資料7の2~3頁には「文献紹介『主日の福音資料集』」の記事がみえ、資料8~12はいずれも『主日の福音資料集』関連の発行物もしくは案内物であることから、これらは高田が現代典礼研究会とのかかわりのなかで入手したものと推測できる。あるいは同研究会の第1回総会のときに配られたものかもしれない。

³¹ 「発刊にあたって」『ことばととしし』1号(1978年)4頁参照。編集には『聖書と典礼』誌編集部のメンバーが携わった。創刊当時の編集スタッフは関根英雄、松本錦治、土屋吉正、山本量太郎の4名だった。

³² 「お知らせ『毎日のミサ』(仮称)の発刊と『ことばととしし』の閉刊について」『ことばととしし』119号(1988年)12-13頁。さらに、同120号(1988年)16頁、121号(1988年)4,16頁をも参照。

以上、足早に全 26 資料を紹介した。これら高田家に遺された典礼聖歌関連の文字資料のごく一部をざっと一瞥するだけでも、高田三郎の典礼聖歌の分野における作曲・普及活動が日本の典礼刷新の歩みと密接に関わってきたであろうことが容易に推察される。こうした資料がただちに高田三郎の典礼聖歌観を裏づけるとはいえない。しかし、そのうちのいくつかは確かに高田の目に触れている。その限りにおいて、高田三郎がどのような態度で、さらにはどのような神学を学びつつ、典礼聖歌の作曲とその普及活動を続けたかを知る一つの手がかりになると思われる。

4. 「共に歩く」

その一例として、ここでは資料 2 にみられる高田のメモ書きの内容を紹介することにしよう。

資料 2 と資料 3 は、いずれも氏名は記されていないが、前述の現代典礼研究会第 1 回総会の際に行なわれた小田武彦の講演レジュメと思われる³³。レジュメは「はじめに」「1. 制度としての教会」「2. 神秘的交わり、秘跡としての教会」「3. 伝達者としての教会」「4. 奉仕者としての教会」「5. 教会のモデルのまとめ」「6. 第 1 回福音宣教推進全国会議を受けて」「7. さらなる典礼刷新にむけて」の 8 項目を立て、それぞれ関連する教皇文書、公会議文書、日本司教団文書などの引用を載せている。

このレジュメを見る限り、小田の講演は、A.ダレスの 5 つの教会モデルを紹介しつつ³⁴、1987 年 11 月に開催された第 1 回福音宣教推進全国会議を踏まえ、

³³ 大見寿夫「現代典礼研究会第一回総会開催される」前掲文、3 頁参照。小田武彦（現・英知大学学長、宣教学専攻）は大阪教区司祭であり、現代典礼研究会第一回総会開催当時は日本カトリック宣教研究所長だった。

³⁴ Cf. A. Dulles, *Models of the Church. A Critical Assessment of the Church in all its Aspects*. Second Edition, Dublin 1989, esp. pp. 34-46 (The Church as Institution), 47-62 (The Church as Mystical Communion), 63-75 (The Church as Sacrament), 76-88 (The Church as Herald), 89-102 (The Church as Servant).

より社会に開かれた教会づくりを目指すよう促す内容だったようだ³⁵。典礼のあり方については、資料 2「典礼刷新のための基礎資料」にも引用されるように、典礼を『ともに生きる喜び』を体験し、分かつ場」と位置づけ、「人々の心の琴線に触れるような典礼を生み出す努力」の必要性を説く日本カトリック司教団の文書『ともに喜びをもって生きよう—第 1 回福音宣教推進全国会議にこたえて』を念頭に置きながらの講演であっただろう³⁶。

この小田の講演に、高田は興味をもって耳を傾けたと思われる。特に、小田が「4. 奉仕者としての教会」の項目について述べたあたりに、まとまった書き込みを見ることができる。この項目は 2 つの教会文書を引用する。メモ書きとの関連を明らかにするために、小田のレジユメの引用文のまま以下に記そう。

「現代世界憲章」第 3 項（人間に対する奉仕）

「教会の望むことはただ一つ、すなわち、真理を証明するために、裁くためではなく救うために、奉仕されるためではなく奉仕するために、この世に來たキリスト自身の仕事を、弁護者である霊の導きのもとに続けることである。」³⁷

「現代世界憲章」第 92 項（すべての人との対話）

「教会は福音の知らせによって全世界を照らし、またあらゆる国、民族、文化に属するすべての人を一つの霊の中へ集めるという使命の力によって、誠実な対話を可能にし、強化する兄弟愛のしるしとなる。(略) こうして、キリス

³⁵ 第 1 回福音宣教推進全国会議をはじめ、バチカン公会議以降の日本のカトリック教会の動向をわかりやすく概説したものととしては、『カトペディア 2004』（カトリック中央協議会、2004 年）がある。第 1 回福音宣教推進全国会議については、同書、238-241 頁のほか、カトリック中央協議会編『社会に福音を一福音宣教推進全国会議資料』（カトリック中央協議会、1986 年）、日本カトリック司教団『ともに喜びをもって生きよう—第一回福音宣教推進全国会議にこたえて』（カトリック中央協議会、1988 年）をも参照。

³⁶ 『ともに喜びをもって生きよう』、同書、6 頁参照。

³⁷ 長江恵訳『現代世界憲章』（中央出版社、1967 年）7 頁参照。

ト・イエスにおいて神の子らの家族となるよう召されている人間家族への奉仕のために兄弟的に協力するよう努めよう。」³⁸

日本司教団、「日本の教会の基本方針と優先課題」、1984年

前文「80年代に入った今日、多くの人々が、物質的豊かさだけでは満足せず、精神的価値を求め、『物より心』の時代になりつつある。しかし、能率主義、合理主義による管理化、画一化が社会のあらゆる面で強化され、個人のみならず地域、国家のエゴイズムも露骨になり、落ちこぼされたり、差別されたりする人々がますます多くなってきている。」³⁹

基本方針 2「今日の日本の社会や文化の中には、すでに福音的な芽生えもあるが、多くの人々を弱い立場に追いやり、抑圧、差別している現実もある。私たちカトリック教会の全員が、このような「小さな人々」と共に、キリストの力でこの芽生えを育て、すべての人を大切にする社会と文化に変革する福音の担い手となる。」⁴⁰

高田はこの項目の2箇所にメモ書きをしている。まず、「奉仕されるためではなく奉仕するために、この世に來たキリスト自身の仕事…」の文のある『現代世界憲章』第3条の引用の直後に、

仕かえられるためではなく。

と書き付けている。さらに、続く第92条では「人類家族への奉仕のために」の箇所に下線を引いたうえで、その下に、

³⁸ 同書、149-150頁参照。

³⁹ 『社会に福音を』（前掲書、注35）73頁参照。

⁴⁰ 同書、74頁参照。

教えるためでも 聖化するためではなく（神を知らない人と共に歩く）[原文ママ]

と記し、続いて欄外に縦書き2行に亘り、

私たちが変わるだけでなく（小教区だけでなく）[原文ママ]
日本全体をふまえて、社会と共に歩く

と書いている。

これらのメモは、小田の講演内容への高田の共鳴を表しているといえよう。これまで信徒として典礼聖歌の作曲・普及の奉仕を続けてきた高田自身の、来し方の確認と今後への決心が込められているともいえようか。

「仕えられるためではなく」と高田が書き込んだとき、自身の書き下ろしテクストによる『典礼聖歌』402番「仕えられるためではなく」がおそらく念頭にあったことだろう。『現代世界憲章』および「日本の教会の基本方針と優先課題」の内容は、典礼聖歌の作曲家としての彼の使命をより強く自覚せしめたに違いない。2度にわたる「共に歩く」の言葉は、典礼聖歌が誰のためにつくられ、どのような使命を果たすべきかを確認しているかのようである。典礼聖歌は、一義的には典礼での使用のために作曲された聖歌であるにせよ、「神を知らない人と共に歩く教会の声」、「社会と共に歩く」教会の声として、日本社会のただなかに響くべきものである、と。なぜなら典礼聖歌はすなわち「聖書を歌う」ことであり、この聖歌をとおして「みことば」に触れるすべての人の内奥で、「祈りの精神」そのものが汲み上げられることを望むのであるから、と⁴¹。

むすびにかえて

高田三郎の典礼聖歌は、教会の典礼の場を越えて日本の宗教音楽の一ジャン

⁴¹ 高田三郎『典礼聖歌を作曲して』、前掲書、370-371頁参照。

ルとして広がりつつある。ビクターやフォンテックなどの会社が音楽CDを制作しているほか、キングレコードの「世界宗教音楽ライブラリー」シリーズも、仏教音楽などとともに高田の典礼聖歌を日本を代表する宗教音楽として収めている⁴²。一般合唱団向けの楽譜も、混声用、女声用、男声用の三種が出版されている状況である⁴³。このことは一優れた合唱指揮者でもあった高田自身に依るところが大であったにせよ—高田の典礼聖歌が少なからぬ合唱団や合唱ファンを魅了し続けてきたことを示していよう。こうした視聴や演奏の場で、今なお典礼聖歌が歌い手と聴き手に静かな感動と「祈りの精神」とを呼び起こしているとするれば、「社会の福音化」を目指す日本の教会と軸足を同じくしているといえる。典礼での祈りに源を発する音楽が長い年月をかけて社会に波及し、受容され、感化を及ぼしてゆくプロセス。これがグレゴリオ聖歌をはじめとするキリスト教音楽のあり方だったように思う。と同時にこの音楽史は典礼史でもあったことを見逃してはならない。今後、高田三郎の典礼聖歌の分野における活動を考察するにあたっては、典礼聖歌を日本の典礼史の中に位置づける試みとともに、この「祈りの音楽」が日本の現代音楽史や合唱演奏史にもたらした影響史的な側面にも目を向ける必要があると思われる。

付記：本稿は、「2004年度南山大学パツへ研究奨励金 I-A-2 (Nanzan University Pache Research Subsidy I-A-2 for the 2004 academic year)」による研究成果である。本稿執筆にあたりご協力いただいた国際基督教大学宗教音楽センター、宮越俊光（日本カトリック典礼委員会秘書）、齋藤克弘（典礼聖歌研究家）、児玉あずさ（南山大学図書館職員）、三好千春（南山大学人文学部助教授）の諸氏に感謝申し上げます。

⁴² 「日本の『典礼聖歌』」（世界宗教音楽ライブラリー 3、キングレコード、2001年、KICC-5703）。

⁴³ 高田三郎『混声合唱のための典礼聖歌』（カワイ出版、²2001年）、同『女声合唱のための典礼聖歌』（中央出版社、1995年）、同、須賀敬一・木島美紗子監修『男声合唱のための典礼聖歌』（東海メールクワイアー、2001年）、同第2集（同）、同第3集（須賀敬一編曲・監修、木島美紗子・鈴木順監修、2003年）、高田三郎・高田留奈子『典礼聖歌—合本出版後から遺作まで』、前掲書（注11）。